

くつなぐ教室コラム> 「学び・遊び・つなぐ」プロジェクト

3年間のすばらしき日々から

飯田宏信



1 はじめに

私は、在外教育施設教員派遣として、2017年4月から2022年の3月までの3年間、台湾の台北市にある「台北日本人学校」で勤務をした。派遣先が台湾と聞いたとき、自身の中で台湾のイメージが浮かんでこなかった。近い国ではあるが全く知識がなかったことで、逆に台湾という国への興味が高くなったことを思い出した。

台湾をご存じの方は多いかと思うが、改めて紹介をしたい。台湾は、中国大陆と南西諸島の間に位置し、面積はほぼ九州と同じで、豊かな自然と文化に恵まれた国である。人口は約2,339万人で、言語は中国語（台湾華語）、台湾語のほか、客家語や原住民の言語が使われている。気候は1年間を通して温暖で、北が亜熱帯気候、南は熱帯気候に属している。日本との時差は1時間で、親日家も多いことでも知られ、外国人にも理解があり、優しく面倒見の良い人が多く、とてもフレンドリーである。日本語が通じるところも多くあり、80歳以上の方の中には、日本統治時代の名残で日本語が話せる人も多い。また多くの若者が日本語を勉強し、大学生による全国日本語スピーチコンテスト（審査委員として参加させていただいた）も開催されているほどだ。

台湾を簡単に紹介したが、副題にもある「3年間のすばらしき日々から」と書いたように、私自身がこの3年間で多くのことを学んだ。仕事、生活、仲間、文化、価値観などから。様々な経験から視野も広がり「もらったもの」もたくさんあった。このコラムでは、日本人学校で働く魅力や「もらったもの」を伝えていきたい。

2 台北での私生活

2017年4月、台北市にある松山空港に到着し、台北日本人学校の多くの先生方に出迎えていただいた。空港を一步出ると、気温は25℃、湿度も高い台北の暑さに驚いた。空港から台北日本人学校へ向かう貸切バスから市街を眺めると、漢字表記だらけで、改めて異国に来たという実感を持った。3年間の赴任生活のスタートであった。

漢字が多く何となく中国語も理解ができるのではないかと安易な考えであったが、すぐにその意識は砕けていった。見たことのない漢字（旧字体や日本では使われていない漢字）もたくさんあり、漢字しかほぼ目に入らない生活に戸惑いを覚えた。私生活の中でさらに戸惑いを覚えたのは、発音である。「音読みをすれば通じるのでは？」という意識もすぐに砕け散った。例えば、私が住んでいた「天母」は、「テンボ」ではなく「ティエンム（実際は正しくないかもしれないが・・・）」と読む。

日本語にない音ばかりで、上手に発音ができず、聞き取りも難しい。その際は、ボディアクションや筆談、指さしなど。台湾人の「熱い気持ち」と自分自身の奮闘で何とか対応をした。

派遣前年の12月に、赴任先が台北日本人学校との通知を受けてから、台湾についていろいろと調べてみた。その中で、台湾は親日家が多いということを知った。それは想像以上であった。日本が統治していた時代に、様々なインフラが整ったこと、そのことに感謝をしている台湾人が多かった。「日本人は勤勉で、仕事ぶりが丁寧だ」と言う方もいて、日本人であることを誇らしく感じた。

しかし、それは統治時代の一面にすぎない。統治していた50年間、ずっと感謝され安定していたわけではない。日本の言語や文化を強要された辛い経験をした人々が、今も台湾で生きている。統治時代初期には、現地の人々との間で何度も抗争が起き、それを日本政府は武力で制圧してきた。そうした史蹟を訪れると、当時の台

湾の人々、日本から渡ってきた人々、双方が払った犠牲に、心が縮む思いがする。「親日家の多い台湾」の現状に、単純に喜べるわけではない。

台北の街は賑やかである。交通量も多く、特にバイクの多さには驚いた。夜市では小さな店が所せましと並び、観光客だけでなく、地元の人も食べ物・飲み物を片手に歩いている。毎晩、お祭りの雰囲気である。人々の話し声も大きめだと言ってよいだろう。日本から遊びに来た友達を、街の小さな飲食店に連れて行くと、「あの店員さんは怒っているの？」とよく尋ねられる。

こちらに移り住んで最もインパクトがあったのは、台湾人がとにかく世話好きだということである。中国語では「熱心」と表現する。私が中国語を理解できないことなどお構いなしに、すごい熱量で親切にしてくれる。日本人の中には、「余計なお世話だろうか?」「何と声をかけようか?」などと、親切にすることを躊躇してしまう人がいないだろうか。台湾人は、親切にすることに迷いが無い。子ども連れで公共交通機関に乗ると、同時に何人もの方が席を譲ろうとしてくださり、どこにしようか迷うこともあった。「熱心」、見習うべきである。

赴任生活が3年間、このような私生活での場面が多かったが、時間と共に簡単な日常会話もできるようになり、一人でタクシーに乗ったり、買い物では店員とやり取りをしたりできるようになり、台湾を生活を楽しんだ。

3 私が勤務した「台北日本人学校」

(1) 台北日本人学校とは

台北日本人学校は、台北市の北にある天母（士林区中山北路6段）地区にある。1983年（昭和58年）10月に校舎が完成・移転して以来、2022年（令和4年）10月には40年目に入り、2021年度より新校舎での授業が始まっている。令和4年4月15日現在の児童生徒数は、小学部532名、中学部163名、合計695名。学級数は、小学部20学級、中学部6学級、特別支援学級1学級、合計27学級。教職員数は72名で、教職員の内訳は、文部科学省派遣教員34名、現地採用教職員22名、非常勤講師7名、スクールカウンセラー1名、事務職員8名である。また国籍別で見ると、日本人54名、台湾人16名、アメリカ人1名、Eswatini人1名。世界の日本人学校94校の中でも有数の大規模日本人学校である。



(2) 特色のある教育活動

○毎週1時間の中国語活動と英語活動の授業

小学部1年生から中学部3年生まで、習熟度別に分けての少人数授業を行っている。児童生徒の生育歴により、習熟度に差が出るのは当然である。中国語は中華圏ならではの、単純に親しむのではなく、上級レベルの授業では現地の小学校の5年生レベルの教科書を使い（中学部2年生の場合）、日本語を一切話さない状況での授業をしている。授業の一環として言語だけではなく、中国語は端午節や清明節、英語活動ではハロウィンなど、伝統的な行事や風習なども発達段階に合わせて取り組まれている。その時期になると、下校時に教職員も仮装をして児童生徒の見送りをを行い、保護者はその様子を記念撮影する姿があった。



○GIGAスクール構想

2016年の1月頃にiPadを購入しロイロノートやプログラミング、シンキングツールに関するアプリなど、様々な学習アプリを組み合わせた授業を行っている。また2018年度からはChromebookも購入するなど、ICT機器での実践を積み重ねている。授業を構成するにあたり、教員の効果的なアプローチによる質の高い授業実践が不可欠であるが、日本の隣国ということもあり、日本からロイロノートの創業者、Google for Japanの方を招き、教職員の研修も行いスキルupを目指した。

○現地校との盛んな交流

交流会は、現地校との交流を軸に現地理解教育を行っていくものである。交流会は、小学部と中学部の全年が、学年で決まった現地校と行われ、1年間で日本人学校に招待したり、現地校に出かけたりというやり方である。この活動はおよそ30年の歴史があり、現地校との恒例行事となっている。日頃学習した中国語を試す場であり、台湾への興味関心を高めたり、台湾についての理解を深めたりする場でもあるので、重要な役割を担っている行事である。

○魅力的な飛び込み行事

台北は日本から近く、様々な企業が台湾に進出していること、また台湾の首都に台北日本人学校があることなどの利点から、日本では経験できない行事が多くあった。主に年度初めに年間行事予定になく、依頼や紹介から予定になかった行事の実施を「飛び込み行事」という。依頼や紹介の数は多く、児童生徒にとっての



教育効果の視点などから、精選をして実施の決定を決めていた。約8割の依頼や紹介を断らざるを得ない状況でもあった。日本の大手航空会社2社による航空教室、日本文化の伝承授業、著名人との交流や講演、演奏会など。また、台湾の大臣の講演会など、児童生徒、そして教職員も目を輝かせながら参加をしていた。

○その他の特色

①保護者同伴

小学部においては登下校は保護者同伴の必要がある。台湾は比較的治安の良い地域であるが、それでも誘拐事件などは日本よりも多く、保護者同伴をお願いしている。放課後は学校で遊んで良いことになっているが、保護者監督の下という条件がある。学校への出入り口は正門のみであり、守衛が常駐している。学校へ入る場合は、保護者証を見せるか台帳に名前などを記入することが必要になる。

②弁当

給食はなく、原則として弁当持参である。特に、弁当は家庭からの持参だけではなく、マクドナルドや外食弁当の業者に注文をして購入することも認められている。そのため4時間目が終わると、玄関近くの弁当引き渡し場所には多くの子どもたちが並ぶことになる。

③転出入

転出入者がとても多い。特に小学部低中学年では、およそ3割(年間およそ200人)の児童が入れ替わることもある。そのため、1年間を見通した学級経営というよりは、学期ごとの勝負になるといった感がある。

④小中併設校

小中学部併設というのも特色の1つといえる。スポーツフェスティバル(運動会)やミュージックフェスティバル(音楽発表会)では、小学生と中学生が協力しながら計画を立てたり、運営したりしている。委員会活動でも、放送や図書当番など連携を図りそれぞれの分担での仕事を行うこともある。

4 3年間で「もらったもの」

(1) たくさんの出会いから

台北日本人学校は全国各地から、意欲を持って台湾の地に着き、一緒に働いた仲間がいた。常日頃から、児童生徒の情報（実態）を話題に出し、興味関心を引き出せる授業の検討・改善の話をしていた。文部科学省からの派遣教員だけでなく、現地採用の先生、台湾人の先生などと学校教育目標実現のために、様々な視点や考え方をシェアし授業実践を行った。児童生徒や保護者のニーズもストレートに飛び込んでくる学校であったため、頻繁に児童生徒や保護者と対話することもあった。台北日本人学校のみんなで、さらにより学校、そして授業を実現していこうという、特色になるかもしれないがこれらの出会いを通して教育への意欲がさらに増した。

飛び込み行事でも少し触れたが、日本ではなかなか出会えない多くの方々との出会いがあった。台湾の「民主化の父」と言われた、故李登輝元総統にお会いできたことは、私にとって素晴らしく、そして貴重な経験であった。歴史に名を残されている元総統と握手や話をさせていただいたことは、これまでの歴史を振り返るきっかけをいただいたように思う。この出会いがあったからこそ、台湾という国をより理解できた。

その他にも、大学教授や様々な企業の方、著名人など、中には現在も繋がっている方がいる。繋がりがあからこそこれを活かし、今後の教育実践につなげ、さらに効果的な教育へ発展させていきたい。



(2) 人として

意欲を持ち、自分自身の力を発揮する3年間という意気込みで台湾生活をスタートした。しかし、時間が経つにつれ、自分の様々な価値観が当たり前ではなく、主観、勝手な価値観であることに気づかされた。鳥取の教育観、日本の教育観、もっと言えば「日本人」として。そのときの価値観は、本当に失礼なものであったと反省をしている。日本各地から集まった仲間との教育観や指導法の違い、台湾との文化の違いなど、自分の器の小ささや、視野の狭さを痛感した。「自分の力とは何だろう？」と。それからは、「聞く耳や相手を尊重する気持ちを持ちながら互いに考えを伝え合うこと」「『児童生徒の成長のために』という共通の願いを念頭に、合意形成を図りながら教育を進めることの大切さ」「前提にある、時間をかけ互いにコミュニケーションを取り合うことでの構築された信頼関係」。人として気づかされ、新たな価値観を「もらった」。

5 おわりに

異国での生活は本当に大変であったが、多くの人（同僚、同僚の家族、現地の方々など）に助けもらった。その中で「共に生きる」ことを実感した。日本人特有かもしれないが、「おかげさまの気持ち」「周りの人がいることで自分は生かされている」ことも。帰国して3年ほど経った今、目の前の子ども達や先生方、保護者のほとんどが日本人であるが、一人ひとり違う多様な考え方をしていると改めて気づかされた。世界中どこにいても、大事なことは一緒なんだと感じている。

先日、鳥取大学で多くの学生に話をする貴重な機会をいただいた。話の最後に、これから教職を目指す学生へのエールとして3つのことを伝えた。

- ・広い視野をもって→周りをよく見てみよう
- ・周囲への感謝→支えられて生きているという気持ち
- ・いろいろな人の考え→みんなそれぞれの価値観がある



学生へのエールではあるが、私自身の今後の教員生活でも決して忘れてはいけないことである。互いに生きていく中で、この意識が高まると、様々な場面で「気持ちよく」仕事をしたり生活したりすることに繋がると考

えている。

最後に、在外教育施設派遣期間中にはたくさんのことを「もらった」。一つ一つが私にとっての宝となった。まさに「3年間のすばらしき日々」であった。このコラムを読んでいただき、教職はもちろん、海外、そして日本人学校で働く魅力を感じていただけたら幸いである。

飯田宏信 (鳥取県立倉吉養護学校教諭)